

ボローニャにて—その3—

◆Piazza Maggiore に設置されたテントの意味が分かった。沢山のお店が集まっているのだ。



多くの人も集まって、中には立ち食いをしている人もいる。何かと思って近づいてみると、ボローニャを中心とした地域のチョコレート屋さんが集まっていたのだ。聞くところによると、毎年このような会場が設置され、自慢のチョコレートを展示即売するそうだ。覗くと、様々なチョコレート、というよりもチョコレートでできた様々な形態のお菓子が、並んでいた。



錆びたハサミなどではなく、それに似せて作られたチョコレート。



様々なチョコ。



Gelato で有名な La Sorbetteria Castiglione も出店している。

生来、あまり甘いものを欲しいと思わない私にとっては、色々な種類のチョコを見ることができただけで満足できるイベントであった。ただ、ここまでチョコレート尽くしだと、何か一つで

も購入して、賞味しなければならぬのでは、という一種の集団催眠商法に似たような感覚に、勝手に陥ってしまい、しかし特にチョコなど食べたいという気持ちは全く起こらなかったのも、結局、マロングラッセを二つ購入して、食べてみた。予想通り、「あまい！」であった。まあ仕方のないことだと思い、広場を後にした。



大きめだったので、二つで 3.9€。もっと小さいのは一つ 1.5€だった。

◆まだ本調子でない。もう少し栄養のあるものを食べなければ、と思い、また Bassotto に行ってしまった。今度は夕食時である。18時30分になってすぐに入店したのだ。すでに数人の客が食事を始めかけている。私は Menu(セット)にした。



なぜか店員に顔を覚えられている気がする。そのせいか、ちょっと大盛り気味によそってくれるのだ。ただでさえ大盛りなのが、特盛りになってしまう。でも、その好意はありがたく受け取らなければならない。

今回は勝手に命名すると、大マカロニ・ラザニア(primo piatto)、白身魚にパン粉をまぶして塩味にして焼き揚げたもの(secondo piatto)、塩入パン(pane)、野菜を圧力鍋で柔らかくしたような付け合わせ(contorno)、ボトルの水(aqua500ml)である。これで 9€。

このラザニアだが、味は良い。しかし量が 400g はありそうな、魚も私の眼鏡と比較してほしい。かなり大ぶりなものが 1.5 枚。野菜は無味であり、自分で胡椒や塩、オリーブオイルなどで味付けをするのだが、結構な量である。今回は、申し訳なかったが、ラザニアを半分残してしまった。もう胃が受け付けられないのである。パンは、自宅に持って帰って翌日の朝食とした。全体に無味に近い濃い味付けなので、しかも塩味が強いので、500ml のペットボトルは、その場ですべて飲みきってしまった。

そんなに量が多いのなら一品だけ頼めば、という意見もあるだろうが、それをする、cassa(レ

ジ)の女性に、男のくせにこれしか食べないの?情けないわね!のような視線で見られるのだ。そして、○と△を加えると **Menu** になるのよ、といわれる。それでも一品だけにすると、本当にこれだけでいいの?よくそれで生きていられるわね、のような表情で、料金のやり取りをしなければならない。さらに、前後の男性がしっかりと **Menu** を持ってくると、イタリア人女性得意の満面の笑みで、さすが男のなかの男!こうでなくっちゃ、作り甲斐がないわ!で、そのあと一品だけの者が続くと、その表情の落差に、無理をしてでも **Menu** を、という気にさせるのである。あ〜、なぜお金を払う方が、こんなに弱い立場なのだろう(私だけかもしれないが)。そこから得た自己防衛手段、**Bassotto** には時々行く位が丁度良い。

◆イタリア語の聞き取りは未だ至難である。でも最近、相手の話の内容と私の直感がかなり高い確率で一致するようになったと思う。先日も、近くの **bar** リン・シャンミンの店に行き、ちょっと小腹がすいていたので、サンドイッチ等々を頼み、会計の時 **5.5€**と云われた。細かいのがないから **20€**出した。で、お釣りは **15€**。その時お店の女の子が、今日は **0.5€**はいいよ、おまけだよ、といったのだが、一つ一つの単語は明確には分からなかったが、内容はぴったりであった。本当にいいの?いいよ、ありがとう、じゃあまたね、といって店を出た。また柔道場に入門希望者が来て、一通り一緒に稽古をした後、私が白帯をしていたせいもあってか、いつから、どのくらいやっているの?と聞いてきた。とても早口で、ちょっとなまりがあり、口ごもり気味なしゃべり方である。これまでだったら聞き取れもせず、内容も分からなかったであろう。でもその時は、その内容が分かり、まあ、夏休み前からだけど、夏休みには稽古がなかったから、トータルすればあまり多くはしていないよ、と云ったら、そうかそうか、分かった、と言っていた。

その一方、より簡単な内容でも緊張していると、聞き取れなくなるものだ。先日、柔道場の仲間の女子柔道家の家に行った。遊びに行ったわけではない。柔道関係の日本語の本をイタリア語に翻訳しようという作業である。もちろんイタリア語は彼女が書く。私は単に内容を話すだけだ。でもそのような作業をする場所がないので、彼女の家に行くことにしたのだ。そこにいたのは、彼女のお母さん。この歳になっても、女性の家に行くというのは、なぜか非常に緊張する。ただの友人として異性の家を訪問することなど、これまでなかったような気がする。彼女のお母さんが、お子さんは何人?というような、まるで典型的なイタリア語会話をしてくれたのだが、**figli**(子供・複数)と **fratelli**(兄弟・複数)をも聞き間違えるという、きわめて初歩的なミスの連続であった。しかもイタリア語 **oceano**(海・大洋)を英語発音で言ってしまう(オチェアノをオーシャン)、キョトンとされるし、さんざんであった。ということは、イタリア語の実力そのものは、まだまだ付いていないということなのだろう。滞在期間はあと約4カ月である。



送っていただいた木刀で稽古。こんなことばかりしていて、研究の方は……。

◆最近めっきり寒くなった。冷たい空気で皮膚が切れるのではないかと思う位だ。でも、これからもっと寒くなるという。

ある日、あたりが薄暗くなりかけていたころ、イタリア語学校の授業が終わって、建物から道に出た。古い建物なので、大きな分厚い木製の扉を、よっこらしょ、っと開けるのだ。そして外に出た途端、扉の前を歩いていた、ちょっと胡散臭そうなオジサンが、扉が急に開いたことに驚いたらしく、びっくりした顔をして、次に出た言葉が、「あ〜っ驚いた。金をくれ。」だった。この驚いたことと金員を要求することの間にいかなる因果関係があるのか。驚いたことの慰謝料としての要求なのか。同じことを日本でおこなったら、おそらく脅迫罪あるいは恐喝罪になるのではないだろうか?いや、彼は決して私を脅してはいないのだから、罪にはならないだろう。この予想しなかった事態にこちらが「あ〜っ驚いた」になってしまった。

通常ならば、この理不尽な要求をきっぱりと撥ねつけるのだが、師走に近づいてきたもの寂しさと、このオジサンの物怖じしない、かつあまりにも良いタイミングでの要求に、つい幾ばくかの金員を付与する気持ちになってしまった。彼は左手を開いて私の前に差し出す。その手のひらには、おそらく多くの人の善意と思われる 10centesimi(10 円)や 20centesimi(20 円)のコインが乗っかっていた。最初、私にくれるのかと思って、non grazie(結構です)と云ったが、彼のイタリア語が良く分からず、またこの状況で私にお布施などしてくれるはずなく、最初に「金をくれ」と言っているのだから、その掌中にお金を置くようにとの指示なのだろう。で、20centesimi(20 円)コインを一枚置いた。彼はそれが 10centesimi か 20centesimi かを確認するようにしばらく見ていたが、それが彼の掌中にある多くのコインの中で最も高額なコインと同額であると分かったと、グラッチェと言って、立ち去って行った。彼はスペイン語圏の人だったのだろうか。クリスマスが近づくと、このような人たちが多くなるようだ。彼の掌中のコインの数を思い出すと、おそらく多くても 3€くらいだろう。それで夕食を摂るのだろうか。いやいや、ポケットの中には札束を持っているかもしれない。この街ではありそうなことだ。



bar の外では焚火代わりの炎が準備されている。こんなにしてまで外にいたいのか、イタリア人よ!でも店内は狭いから、外にテーブルを設置することにも一理ある。「店内の広さ」+「従業員数」+「テーブル数」+「やる気」=「外に設置するテーブルの数」のような気がする(いい加減でスママセン)。

◆古い街であるボローニャにも、やはり流行があるようだ。この街には Furla という地元の有名鞆屋さんがいるのだが、それでも小さなスペースを改装して、ルイ・ヴィトンやバーバリー、カルティエ、ブルガリなどといった有名店を集めた一角がしばらく前にオープンした。

私はこの手のものには全く興味がなかったが、散歩していたらその一角に迷い込んでしまった。クリスマス間近なので、それなりの飾り付けが始まっているが、やはり高いものは高い。それよりも、おそらく知る人ぞ知る店であろうが、帽子屋さんや靴屋さんなど、まさに手作り超高級品のお店も、店を構えていた。いったい誰がこんな高級なものを買うのだろうか、と思いつつ、ふらふらと歩いていたら、Piazza Maggiore の近くに出てしまった。まあ、あの一角には二度と行くことはないだろう。



有名ブランド店が軒をつらねる一角。徐々にクリスマスの飾り付けが始まっている。

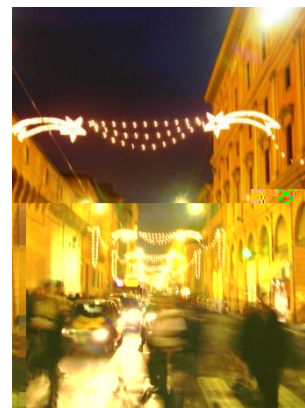
クリスマスといえば、Piazza Maggiore の目の前の Via del Indipendenza と、Via Ugo Bassi へと続く Via Rizzoli が交わる交差点から見ると、それぞれの大通り (Via) でも飾り付けが始まっている。due torri も電飾されている。これからもっと華やかになるのだろう。



due torri と Via Rizzoli



Via del Indipendenza



Via Ugo Bassi 方面

◆何度も繰り返し書いているようだが、とにかく寒い。部屋が寒いのだ。暖房が入っていない。そこで、現在取り掛かっている柔道関係の翻訳を次回までに、できるだけ進めてしまおうと考え場所を探していた。Antonio Cicu 法学研究所兼図書館は、やはり「場に合わない」ので、別の場所を探さなければならない。しかし日本のように喫茶店で作業をするということは、この習慣上できない。そこで残る選択は公立図書館 Sala Borsa である。日曜日は閉館。土曜日は 10 時～19 時まで。そこで土曜日の午後行ってみるとやはり寒さをしのぐために、老若男女、満員御礼である。いつものテーブルも満席。仕方がないので、大きな通路に設置してあるソファを見

つけ、そこで 3 時間余り作業をしたが、そのあと、無理な姿勢が祟ったか、首が痛くその痛みが頭痛まで引き起こしてしまった。これから暖かい場所を探して渡り鳥のように街中を転々としなければならないことを思うと、かなり憂鬱になる。



破損した本や汚された本が真空パックにされて、天井から吊下げられている。いやでも人目に付く。結構多くの人が立ち止まって見ている。

私が座ったソファの目の前に、上記写真のようなものが吊下げられていた。最初は芸術的オブジェの一つかな、と思っていたが、よく見ると、“*trattami con amore*” (大切に扱ってね)と書いてある。これは、心ない利用者によって破損されたり、汚されたりした書籍を、人目にさらすことで、利用者の注意を喚起しているのだ。なかなか良いアイディだと思う。やることが「明るい」のである。この点は見習うべきではないかと思いつつ、痛い首をさすって帰路についた。

◆柔道場で稽古初めの時、師範の Pino さんが来て、12 月 4 日の金曜日の夜、柔術のなかの棒術を参加者に教えてくれ、と言い出した。これも彼の道場経営の一助になればと思い、引き受けたのだが、そもそもここには六尺棒がない。そこで用意はできるのかと聞いたら、大丈夫、木工工場に行って適当に買ってくるから、とのこと。まあ何とかなるだろうと思っていると、矢継ぎ早に、来年 1 月 1 日、2 日、3 日と寒稽古と鏡開式を行うから参加するように、柔術の稽古もするからよろしく、というのだ。正月三箇日は、炬燵に潜って蜜柑を食べながら、お正月の特別テレビ番組を見るというのが、正当な日本のお正月の過ごし方である。しかしその常識は通用しない。何しろ、来年 9 月に嘉納治五郎先生生誕 150 年記念 Festa を開催するというくらい、嘉納先生と講道館の儀式が好きなのだ。現在の翻訳もこの Festa に間に合うように急いでいる。嘉納治五郎は、日本では柔道の創始者くらいの認識だが、こちらでは柔道を媒介にした哲学者であり思想家であり教育者であるという、極めて高い評価を受けていることが分かった。嘉納治五郎研究の大学教授もいるという位なのだ。

ところで講道館では「おしるこ会」があるが、ここでもおしるこを食べるのか、つとあとで面々に聞いたら、食べるけど、そもそも「おしるこ」の作り方が分からないし、おもちもないので、ここではおしるこ色のチョコレートとお酒代わりのワイン、おもち代わりのパンで鏡開式を行うのだそうだ。まあパスタと云わなかつただけ、おしるこを尊重しているのだろう。たしかに所変わればなんとやら…だが。しかし、寒稽古には参りました。寒いのにどうしようと今から心配しつつ、まだ首の痛みが取れないので、早く寝ることにした。

(続く)